

2016 年度研究大会

2016 年度研究大会は、以下の通りである。

- (1) 日時：2016 年 12 月 10 日（土）
- (2) 時間：13 時～18 時
- (3) 場所：埼玉大学教養学部 21 番教室
- (4) 研究大会の進行：口頭発表（1 名の発表時間＝発表 35 分＋質疑 25 分）

- ・ 発表①：中村信督（埼玉大学教養学部生）
「題名の歌詞への関連の仕方」
鈴木愛海（埼玉大学教養学部生）
「使役分析の系譜—生成意味論、認知意味論、極小理論をへて—」
- ・ 発表②：金聖実（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「日本語と韓国語のフィラーの対照研究—「まあ」と「ㄱㄱ」を中心に—」
- ・ 発表③：戴紅（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「日本語類別詞の「有生」と「無生」に関する考え」
- ・ 発表④：田村隆夫（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「主要部内在型関係節と主要部の先行提示—主要部外在型関係節との語用論的比較のための一助として—」
- ・ 発表⑤：金善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「次元形容詞「深い」の意味に関する日中対照」

日本語と韓国語のフィラーの対照研究

—「まあ」と「ㄱ」を中心に—

金 聖実（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、話し言葉を研究対象とし、その内、談話中に現れるフィラーを検討する。日本語の文法とほぼ同じ形式を用いる韓国語を対象とし、主に、「まあ」と「ㄱ」を中心に対照することによって、両者の相違点を探ることを目的としている。

本研究では、日韓両言語においてのリオ・オリンピックのニュースと大学で学ぶために必要な日本語「アカデミック・ジャパニーズ」（中級、中上級、上級）を研究資料として扱う。「まあ」と「ㄱ」は各言語において、上級レベルで習得できるものであり、その機能面から見ると、類似性が高いものの、それらの位置付けから考察すると、「まあ」は文末には現れないのに対し、「ㄱ」は文頭、文中、文末いずれにも出現可能である。また、「まあ」と「ㄱ」は平叙文では対応関係を、特殊文（命令、勧誘、依頼文）では、不対応関係を持つ。それは、「まあ」は「とりあえず性を帯びた見解表示」というスキーマを持ち、「ㄱ」は「副次情報付加を用いる見解表示」というスキーマを用いるからである。

日本語類別詞の「有生」と「無生」に関する考え

戴 紅（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

松本（1991）では、日本語の類別詞の体系における最も基本的な意味的対立は animacy によるものであり、類別詞は有生のものと、無生物に用いるものに分類されると述べられ、飯田（1999）では、有生であるかどうかについて、生きているものとして話者が捉えていれば、生きていないぬいぐるみ等も有生物としての助数詞で数えることができると述べられている。

「有生」は無生物に対する「生物」の意味なのか、「生きている」の意味なのか、という疑問を持ち、コーパスの用例を考察した。動く意識したものが存在する意で「いる」を用い、意識しないものが存在する意で「ある」を用いるという使い分けに類似して、「大鯉を一本地役人宅に届けた」のように、類別詞の「有生」と「無生」も動いているかどうか注目する日本語の表現の特徴であり、類別詞の分類をする際に、有生のものと無生物の対立にならないのではないかとすることを明らかにしたい。

主要部内在型関係節と主要部の先行提示 —主要部外在型関係節との語用論的比較のための一助として—

田村 隆夫（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

本稿は、日本語の主要部内在型関係節の出現環境に於いて、提示機能を持つと考えられる体言止め表現が先行する場合が散見され、このことが通常的主要部外在型関係節とは異なる主要部内在型関係節の語用論上の特質に関わることを明らかにするものである。谷（2012）では、英語には節的意味を表す関係節付き名詞句が散見され、これは提示機能を持つ述語名詞関係節構文からの拡張もしくは発展であるとされている。SVO 言語である英語と SOV 言語である日本語との間には語順の制約に起因する語用論上の相違が生じるが、それは関係節構造に関しても当てはまる。英語の節的意味を表す関係節付き名詞句は、1 文内の先行する断定部分に後続して新たな断定を加える機能を果たしていると考えられるが、日本語の場合には、これと類似の現象が従属節である主要部内在型関係節と後続文である主節に於いて生じ、さらに提示機能を持つと考えられる表現部分がしばしば両者に先行する。

次元形容詞「深い」の意味に関する日中対照

金 善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

日本語の次元形容詞「深い」と中国語の次元形容詞“深（shēn）”には、同じ用法もあれば、違う用法も見られる。例えば、日本語の「深い」には、「深い森」「深い霧」のような用法が見られるが、中国語の“深”には見られない。また、中国語の“深”には、“庭院深深（深い庭）”“深宮（深い宮）”のような用法が見られるが、日本語の「深い」には見られない。

このような用法の違いが見られる背後には、「深い」と“深”の意味の捉えかたに違いが存在する可能性がある。しかし、今までの「深い」と“深（深い）”に関する研究では、言語的な知識の記述と分析が中心になっており、言語主体の経験に基づく空間認知に関する研究は少ない。

そこで、本研究では、アンケート調査を通して「深い」と“深”の認識実態を分析し、認知言語学のプロトタイプ理論、容器メタファーの概念を利用して、「深い」と“深（深い）”のプロトタイプの意味を認定してから、空間認知における意味の捉え方や認知モード、動機付けについて考えてみたいと思う。